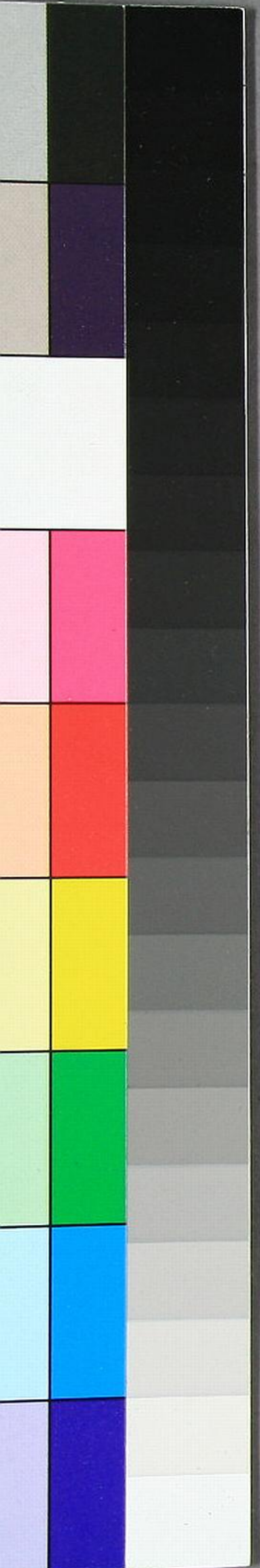




芳川俊雄 関

其名も高橋
妻婦の小傳
東京奇聞

二編上



其名も高橋

毒婦の小傳

東京奇聞

第二編上の巻

己卯
の春

高橋



拙著著述も御負が昨年中秋夜嵐阿衣の冊子で甘味とあめこ
 慾張り又その今度の毒婦傳先月廿一日ハッサリやねと翌日あめこ
 燈火の下で書綴り草稿を内一週り湯場の咄念がへり餘り長いと
 迎いの催促家従はゆぬ小僧の使ひ中旬頃出奔すると島鮮堂
 が大急ぎに不出來ゆめ早くも早いが賞玩の試りに上って南覽
 と賣出のあめこどうであらうと思ひの外お兒さぬ方の御意あ
 適にお傳の後いまご出來ぬることお替り法御催促に力を得て二
 本目の味より川の塩加減極念入の上塩梅あとの催促と受けぬやう
 もと必仕込がしつかりますと手前味噌とゆめあることあめこ

明治十二年二月下旬

岡本勘造題



毒婦二上

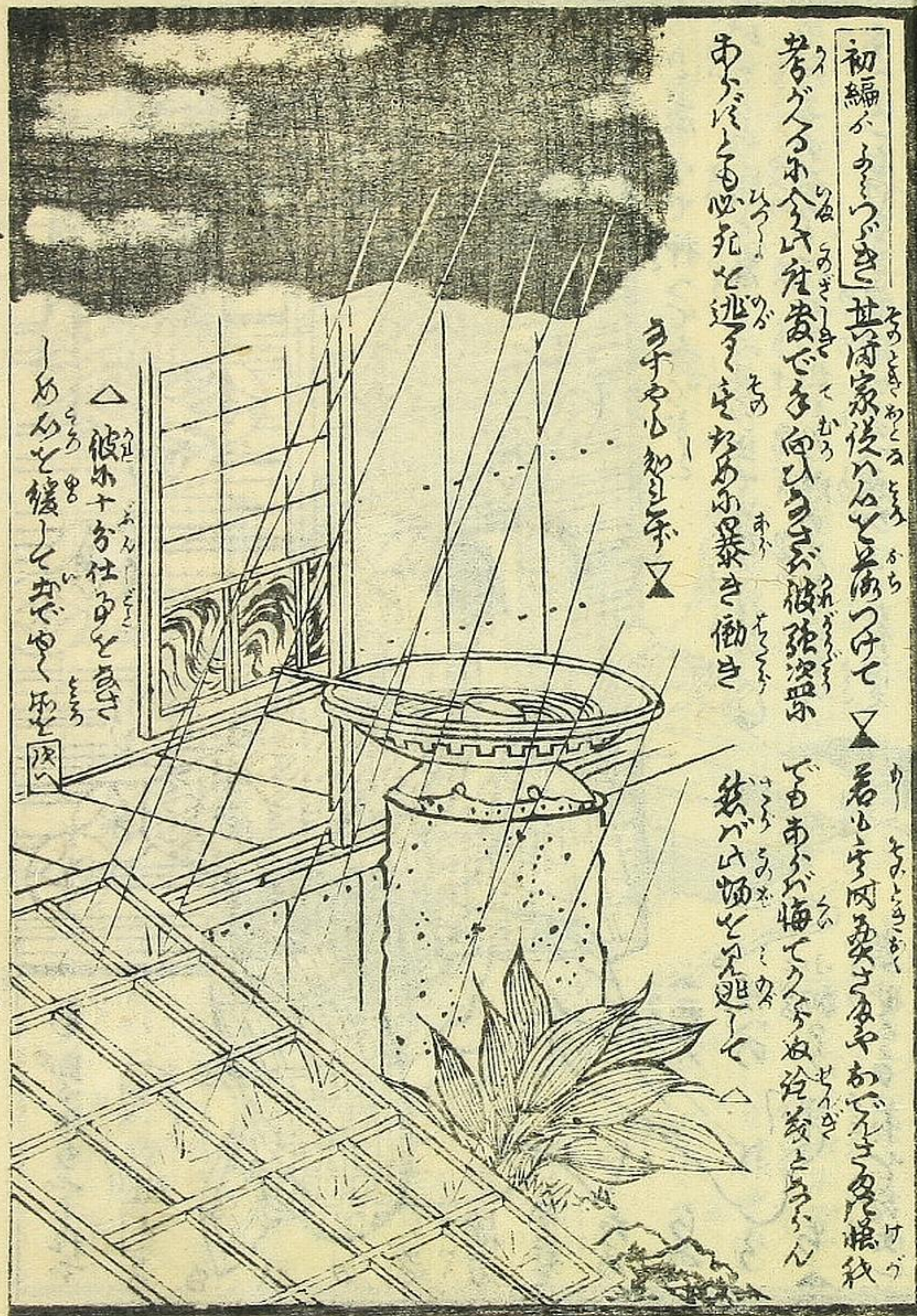


原田の家來
加藤武雄
會津浪人と云



仙之助外妻の
青木放義
放傳の姉と云

古着商人
内山仙之助
後藤吉藏



△彼れ十分仕事と云へ
 りんを懐く事やゆめ

初編のうらつらつと世の家ははんとあつて
 考ぐるふ今にたまたま向ひつゝは彼れ
 あらばとも必死と逃ぐ事ある事なき働き
 多かるる事なき
 △君もその因縁と云ふやあてなきは
 てもあつた悔てうをぬれ後と云ふん
 然れば悔と云ふて



深田在藤川村
 幸正寺の住職
 空善系尚

高橋
 阿傳



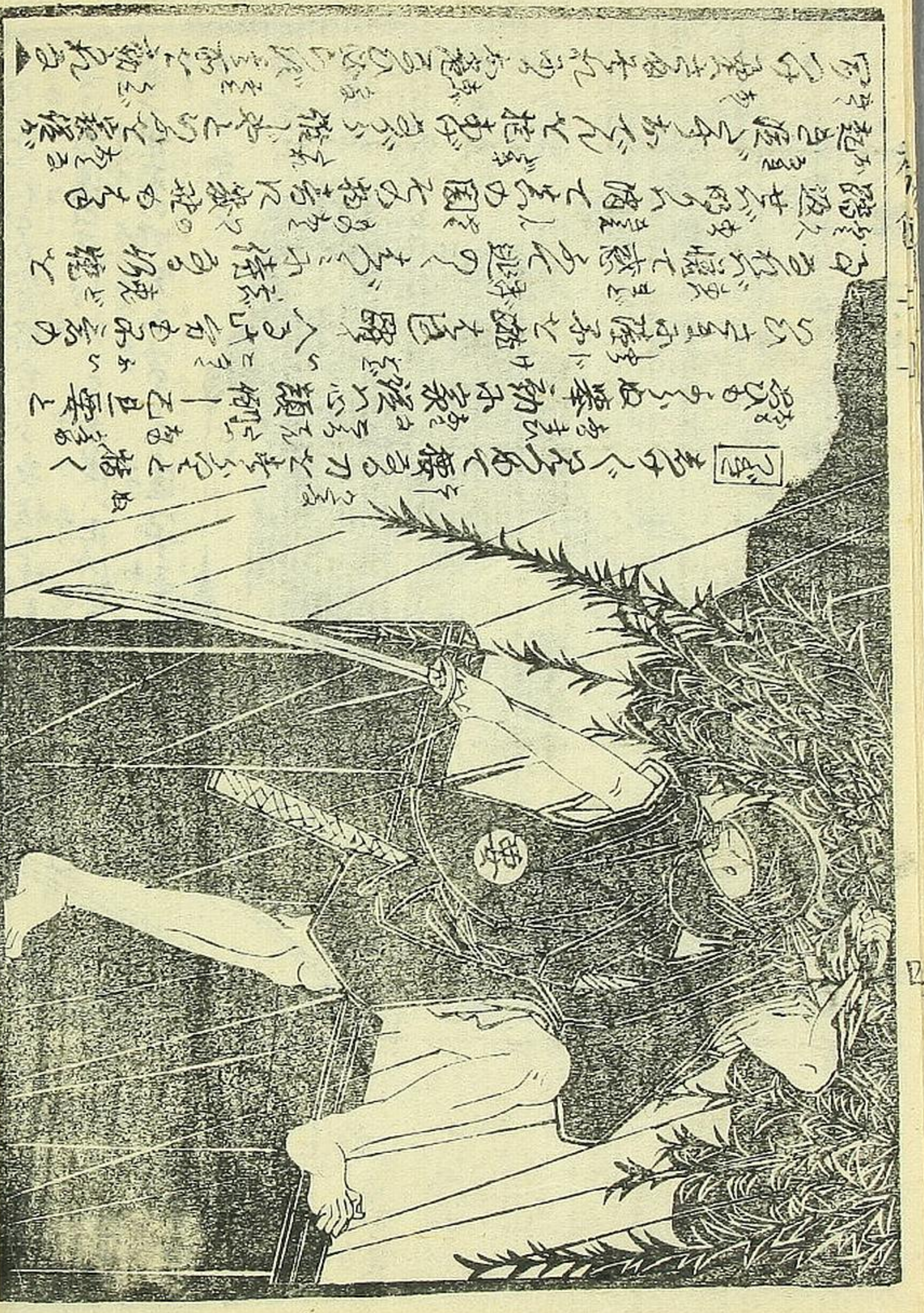
一 席下で押してゐるすと
 け方々の密と席へ入るは出で受たの産後
 の障子の破りも何れ紙の火に燃やされ
 方へはしりもき織物の方へ走びる程の定

要の
 懐の
 小柄の
 織物の方へ走びる程の定

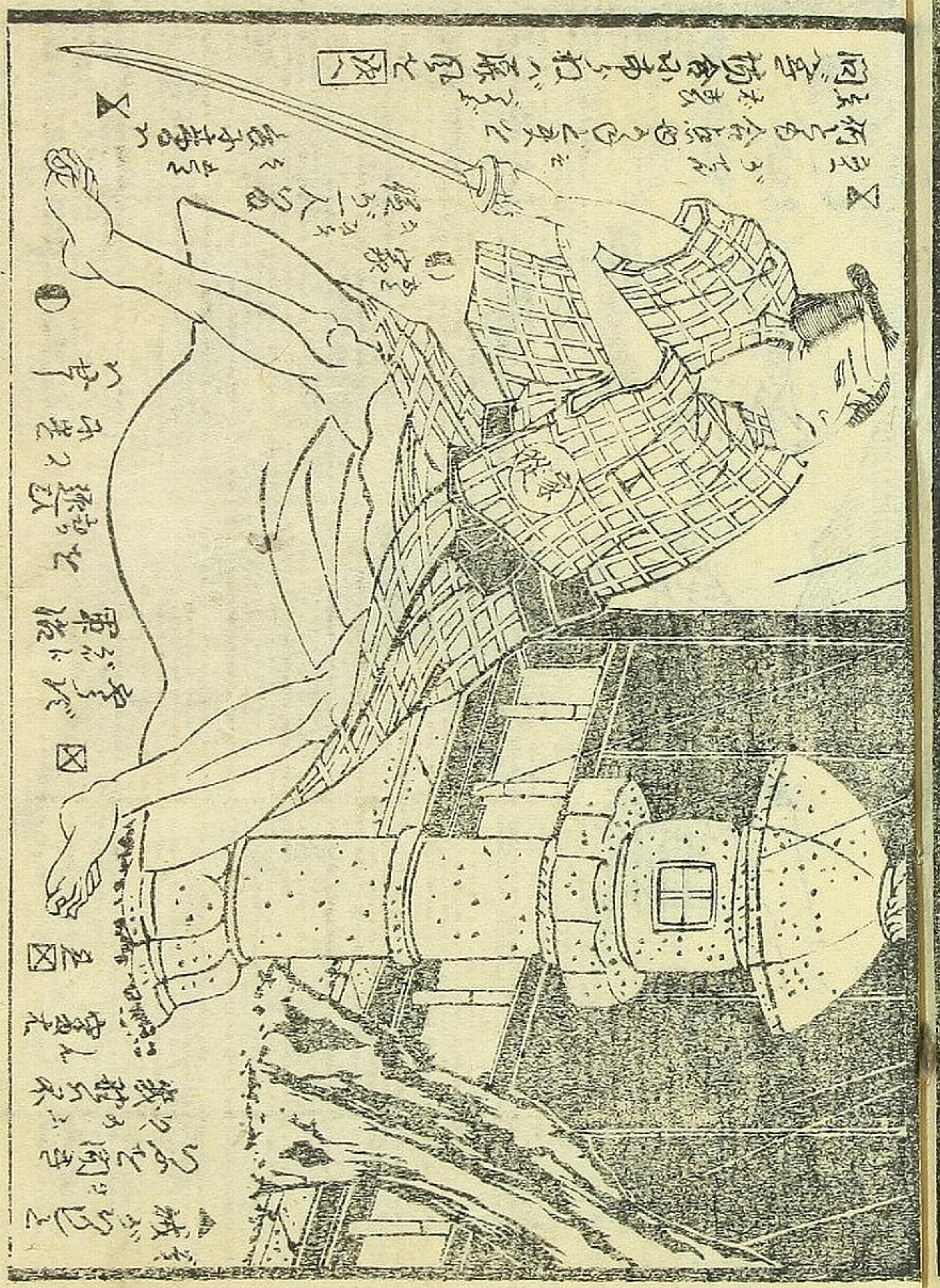


一 密通するて
 要の
 懐の
 小柄の
 織物の方へ走びる程の定

中さる月名のを鑑と
 残りて彼物も押さ
 懐中は
 てホ、やあむ
 織物の不業



【註】あつてふたふたの標る刀を先づ公之播く
あつてふたふたの家流ハ心類柳一玉且要之
公之軍亦勝不之跡と道躰ハるつ分もあふ力
あつてふたふた之慍之跡ハあつてふたふた之
跡ハあつてふたふた之跡ハあつてふたふた之
跡ハあつてふたふた之跡ハあつてふたふた之
跡ハあつてふたふた之跡ハあつてふたふた之
跡ハあつてふたふた之跡ハあつてふたふた之



△受 柄も合点也ハ公之衆ハ
△ 同至物倉中より和ハ麻尾之次ハ
△ 城 城ハ同至
△ 軍 流 軍流ハ
△ 鼓 鼓ハ
△ 鼓 鼓ハ

木ノ下

△



一六
 ともありく十たふ傷をたひせく
 仁後
 中の
 及びねへ

懐かき名を
 出がけを捕
 て取返さんと
 計懐する内
 已小突挿をの

殺害
 又子授
 中世より
 相与械へ
 奈回要小



頼むも安んあはしと驚きとをせ
 旁らふを引とせまらう我形を捕する
 ういあも然とを奪ては上と驚き候
 大面ふ散後す一様と候
 遂刺に出あ
 路中迷ひ違
 く判せ
 手授扱由
 甘牛備にしようか初々の
 次刃中て只今終矢おひま
 とひひの何きもと證を奪
 こあの手合をくる若の
 合と獲らげ盗と出とる

切は
 お遠る紀上
 色む
 抱小
 刀の
 一々幾
 及びねへ
 一六



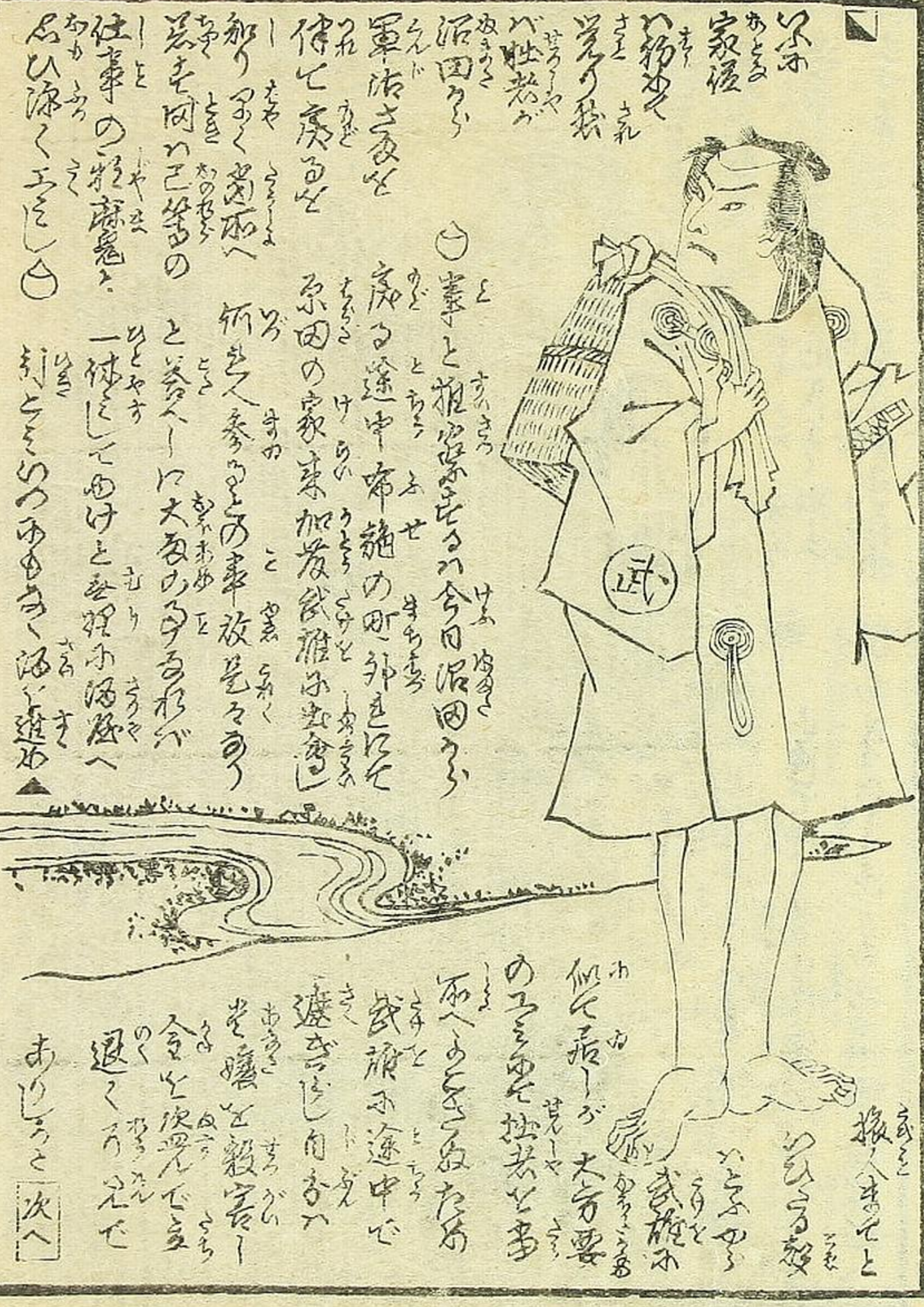
つぎ 要を渡す
 昨日の夜
 今日の大
 湯坊まで

△あり
 次茶と帯の
 と服と
 此要業と
 物ら

△あり
 次茶と帯の
 と服と
 此要業と
 物ら

吐くを仕うけ
 市場の時と昔
 やせうが
 の事では
 てゆく途中
 を夜ふり
 物灯の
 はは
 のお
 中世
 お出
 が今
 その
 中世

吐くを仕うけ
 市場の時と昔
 やせうが
 の事では
 てゆく途中
 を夜ふり
 物灯の
 はは
 のお
 中世
 お出
 が今
 その
 中世



△あり
 次茶と帯の
 と服と
 此要業と
 物ら

△あり
 次茶と帯の
 と服と
 此要業と
 物ら

△あり
 次茶と帯の
 と服と
 此要業と
 物ら

次へ

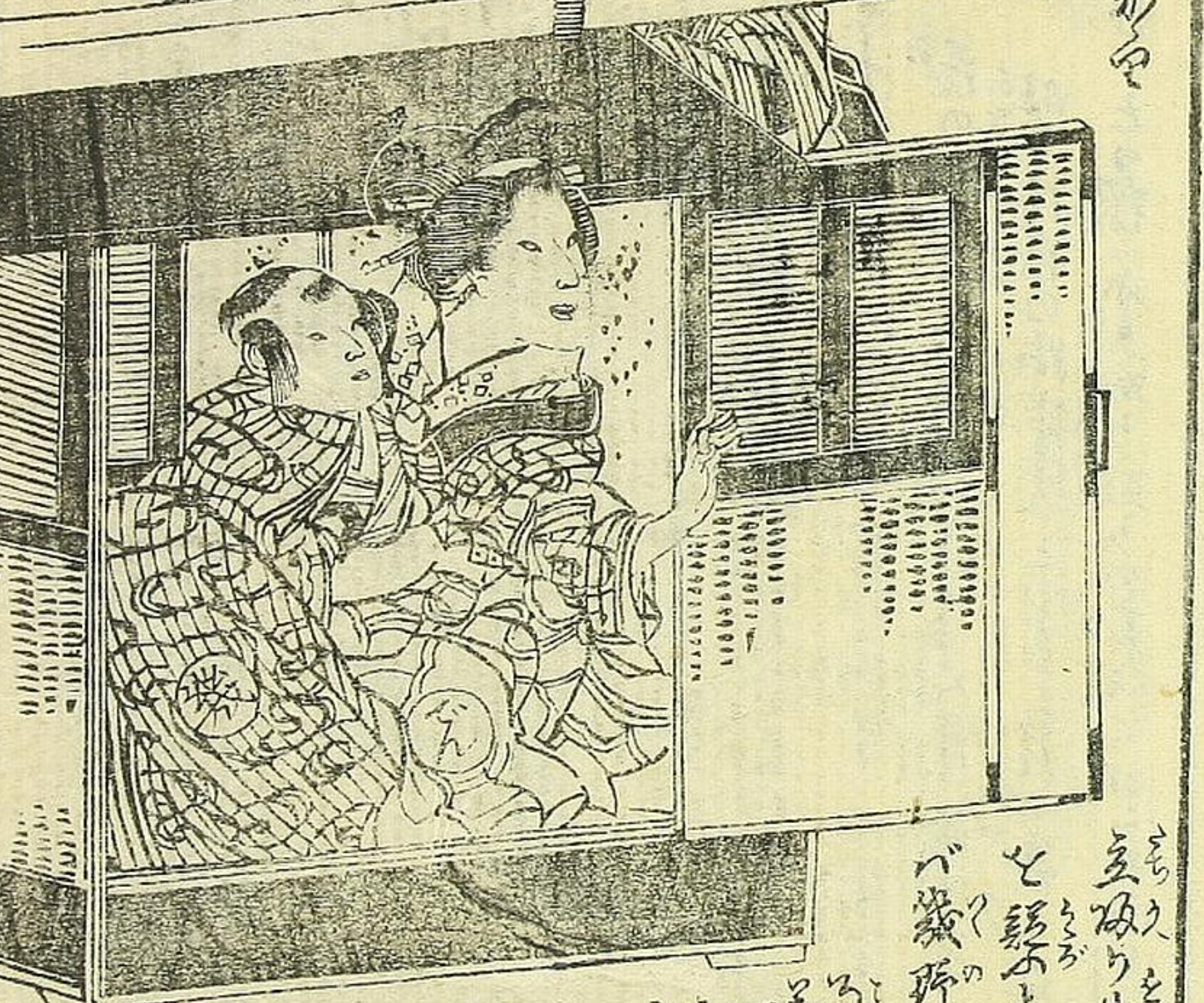
つきの下は上う一々
 あれが幾行の
 標と肩とをい
 互ひおきあひと殺す
 内中軍治が京
 ぬのと家後う遅
 うもぬりてをさび
 あいじら勤若弟のうとを味
 とものく度とをい
 かゆりうらねとひ
 事があつうう一
 返長うが各小ありの
 まる事、小ねさめまより



探らざるめを後とも
 止めて内を要の核
 まくの事
 せんとうを
 上で
 せよ
 奉に
 世よ
 田へ
 入

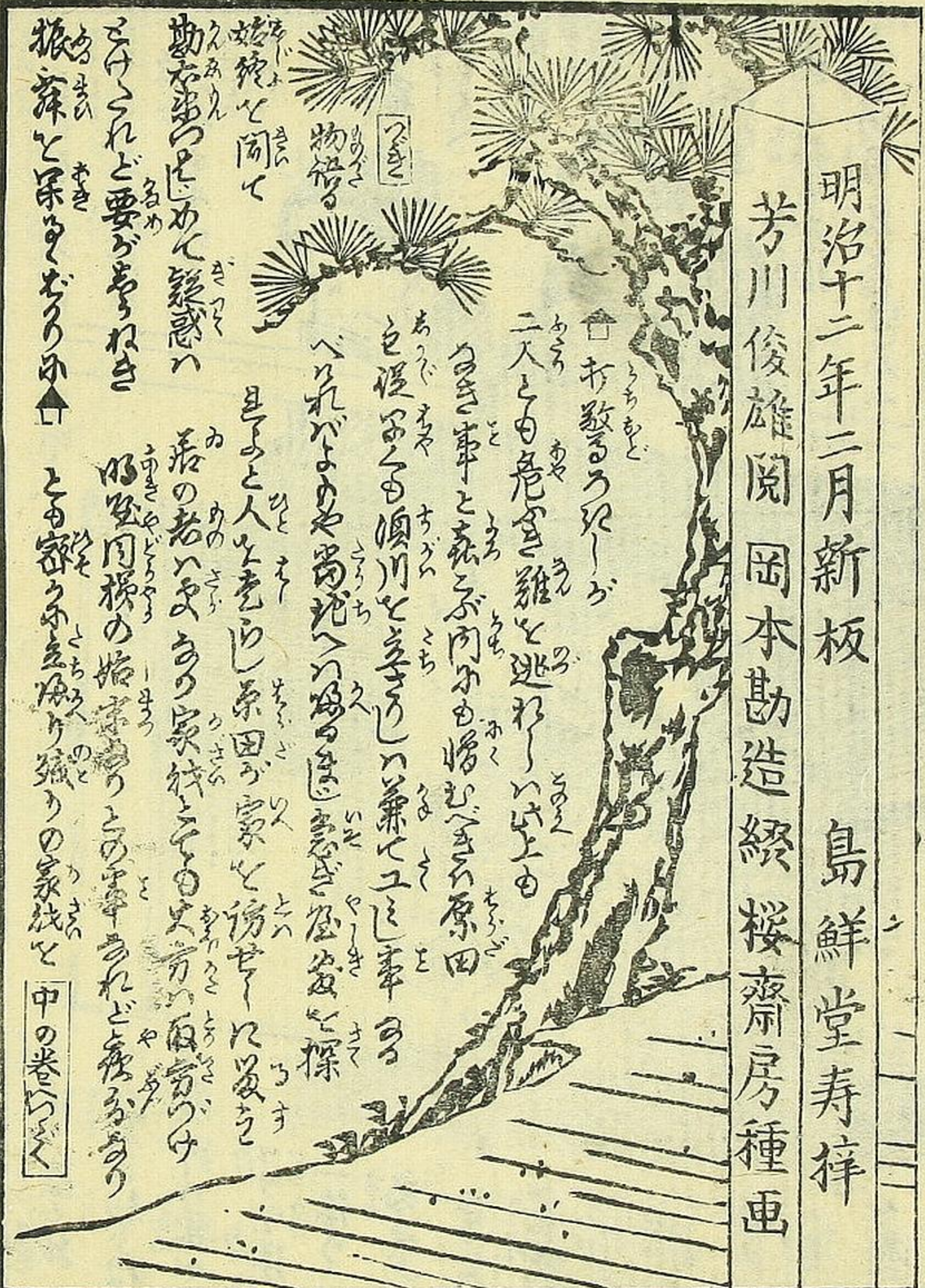


生外の存ううは
 畧用念の敷
 一以夜もやの
 の流り
 ねれハ
 旅宿
 の人へ
 出まの
 熱き
 通
 旅宿
 旅三挺と手持
 人足の用念とをい



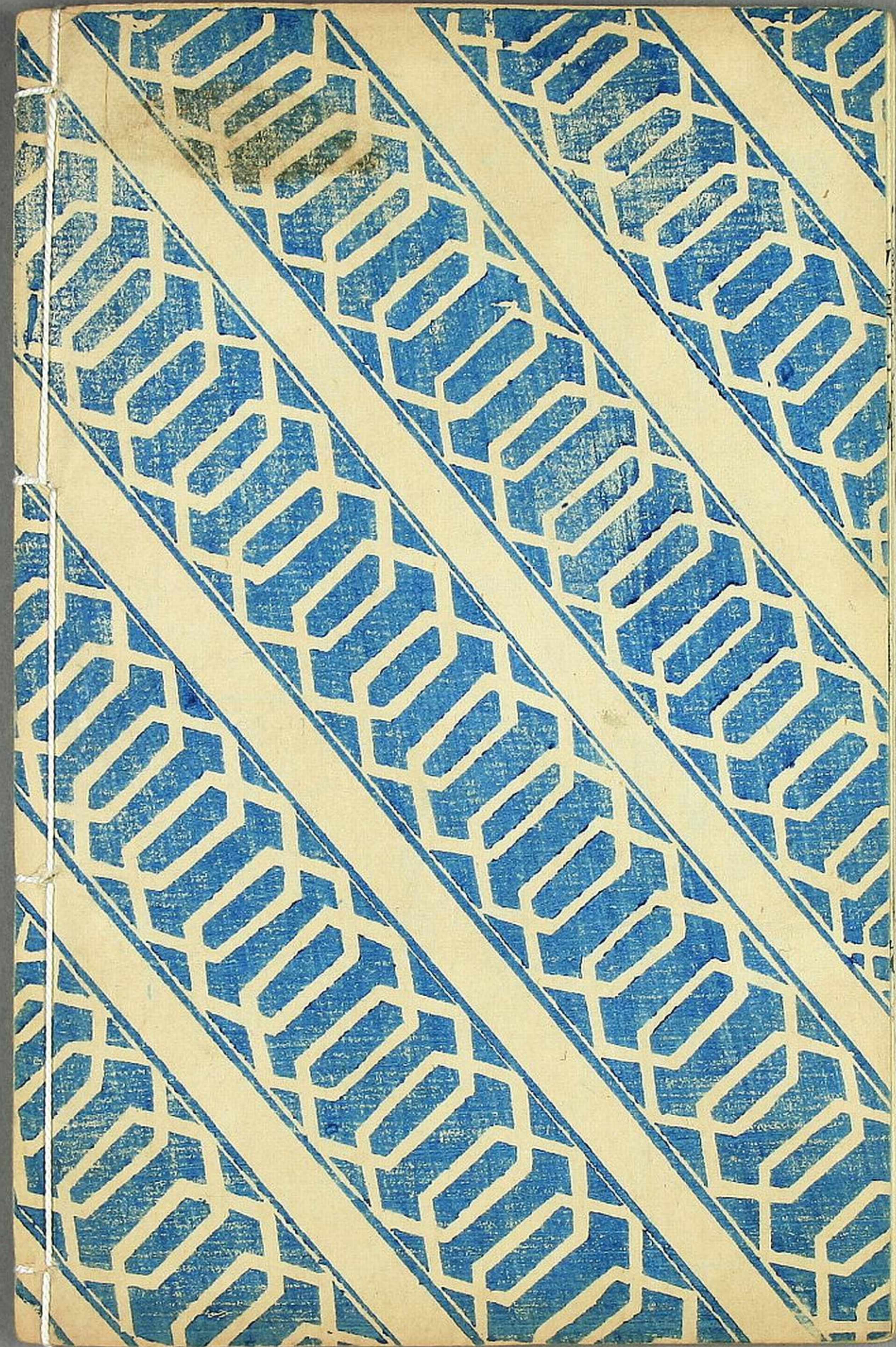
まぬり失が
 と懸ふと知ふね
 一借り
 當さ
 ざる
 家後
 が代ッ
 前
 後
 身
 夜

明治十二年二月新板 島鮮堂寿梓
 芳川俊雄 岡本勘造 綴 桜齋房種画



東京区分繪畵 全	鹿兒島記事 六冊漢切
命と養生の善悪鏡 全	獸類一覽骨牌 一箱
漆所櫻梅松録 十五	在入小本 教品
單語音解 全	漢語骨牌 一箱
大功記名と傳 四冊	善悪振分變文 全
其名も高橋 妻婦の小傳 東京奇聞 追記板	趣町区壹番丁廿七番地 編集人 岡本勘造 浅草瓦町十二番地
地本 錦繪 問屋	板主 綱島龜吉

010190510706





勘造

二編中





生々も
毒婦の
小傳

東京
新町
二編中の巻
長太郎
舟屋
高亮半板

上巻の巻持出するもこれに番人へ前通しを申し渡すに付

あつて初見の要らぬ河川に城を築きてこの邊に茅の束を積み入

番は尚も好まぬと探家と世が交りあつたよ

退身若と兄徹て原田の家へ引籠りし

め候せぬと世の風を運流は疾う

如き公要との候をてある

奉とあつたに内が酒川さま

供する家渡がとてあつ

兄村は内

内小治

世世

も厭はずと候れとて候は

引返させ

幾時とて掛

休度とて掛

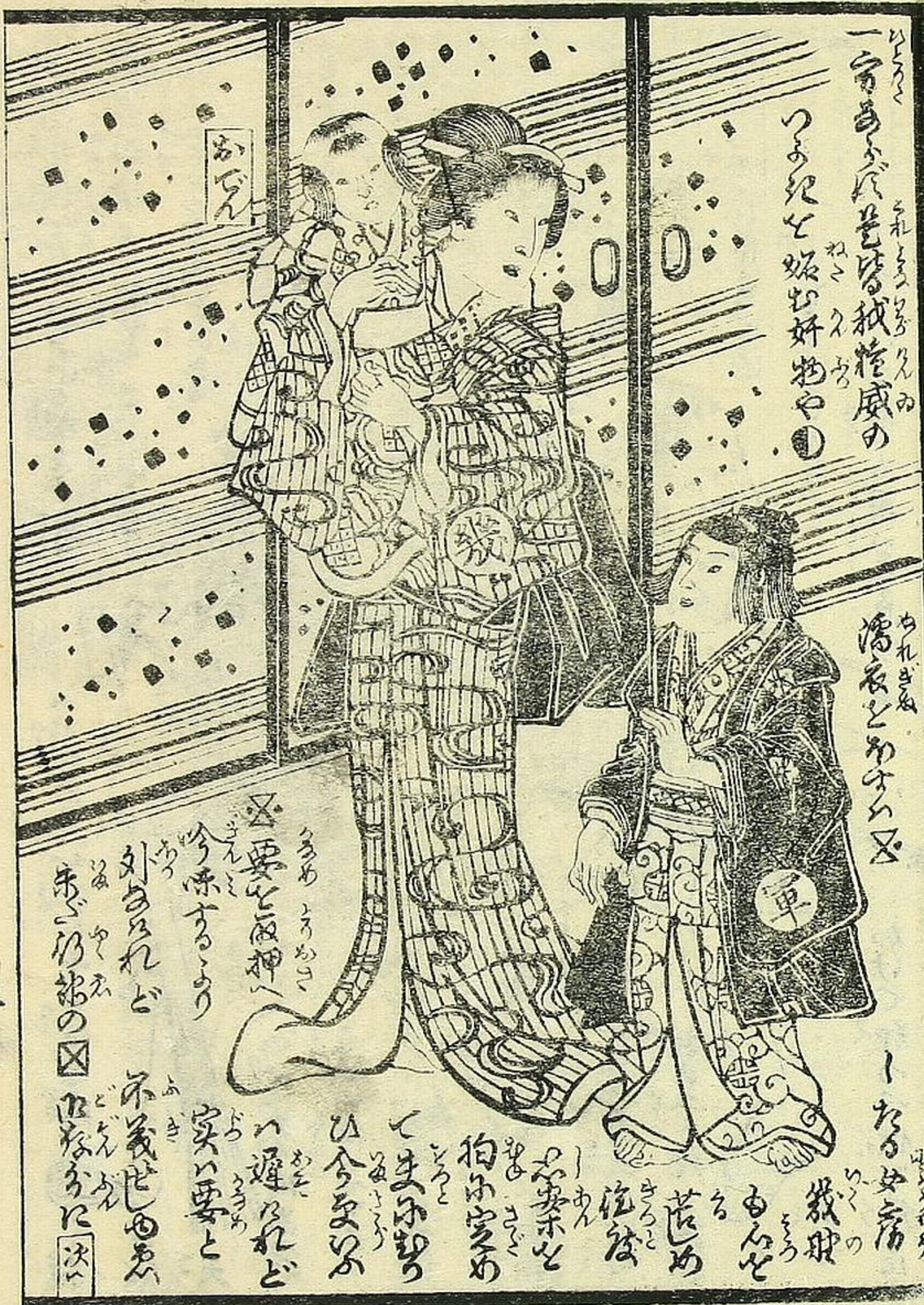
初

要するの申候は

要の候は

出委次へ

夜事二十



一番あふはさばつ枝権威の
つよはと娘の好物や

濡衣とわすれ

一たる女席

必要と御神
今添するあり
外あられど
未だ仍舊の
不義世ゆ
ひ今更
い輝はれど
実い要と
狗も定め
てまはり
ひ今更

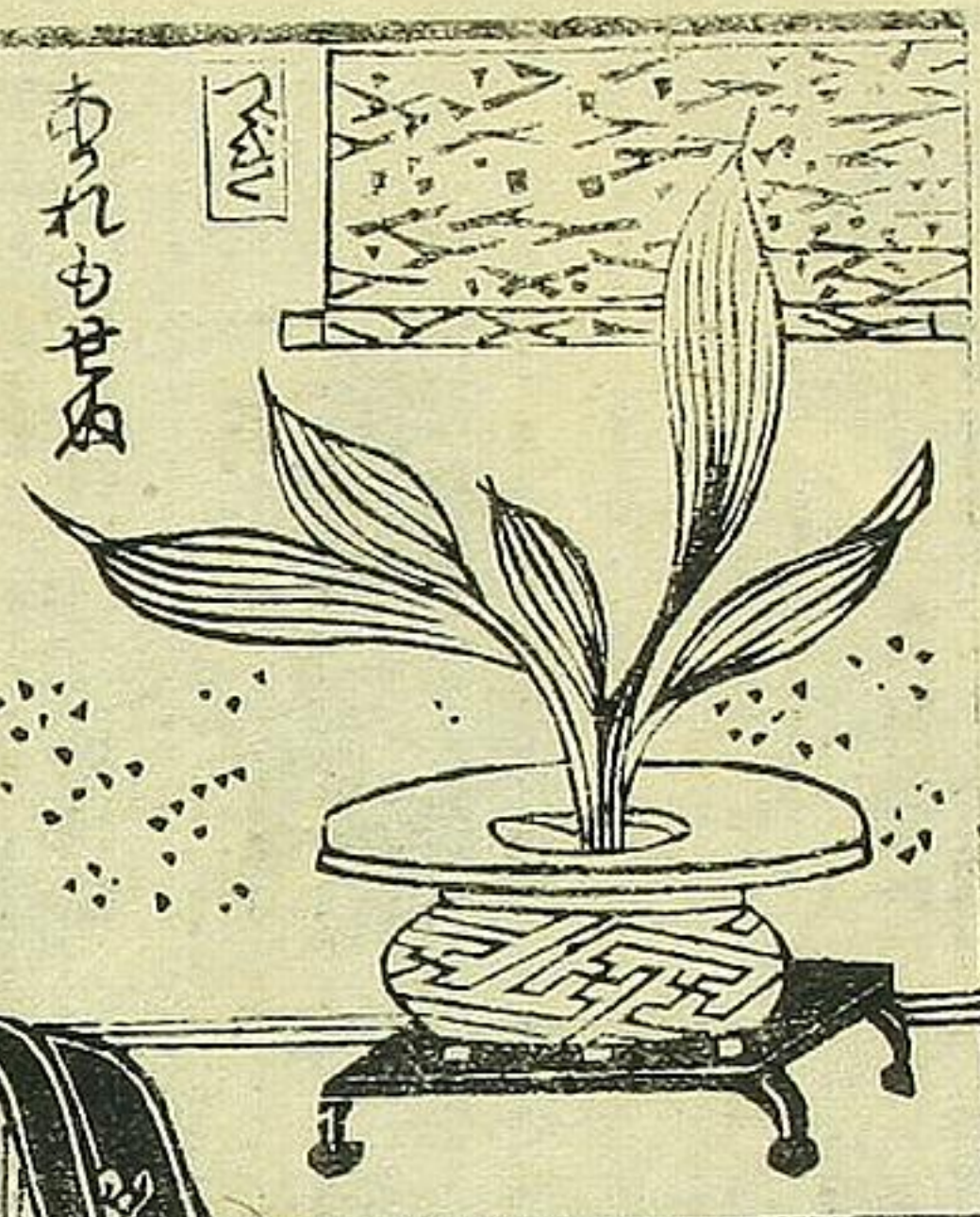


つぎ世と借り届けてのめくと
不義せし女席と女のみ
可きつて
めとつて
娘の好物
の利はる家老と
係判せし由
女ゆつてのめ
り物とと取らぬ
酒はするのめとと事と
西小徳め所はけある用安
扱入る者もある程ゆて
多くするゆを物志の
な

×あれごと如何小
せんを果

○後何人皆
由何と
のせつ
人つ指
く

●歳時のはるるを
一々を解とすは
仔細と
日一間の肉
小同
はあて
のめと
く



あれもせぬ

別とさすも
忠一絶命



習性

あれ
いあてい
そき

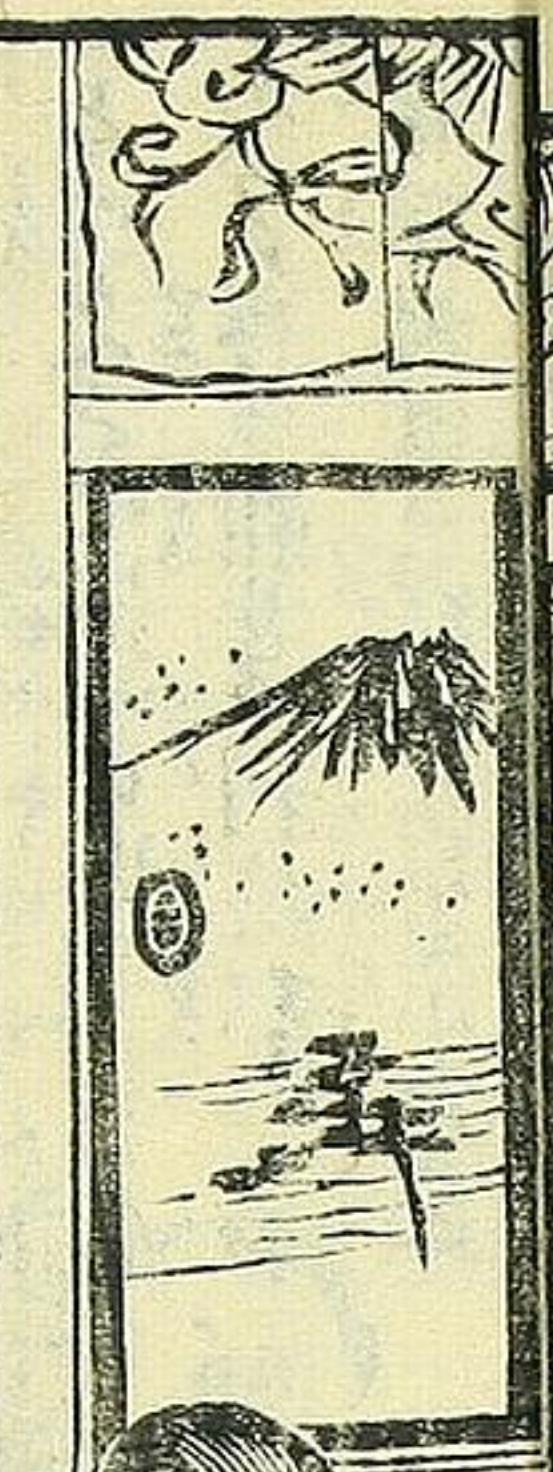


一生方の汚名

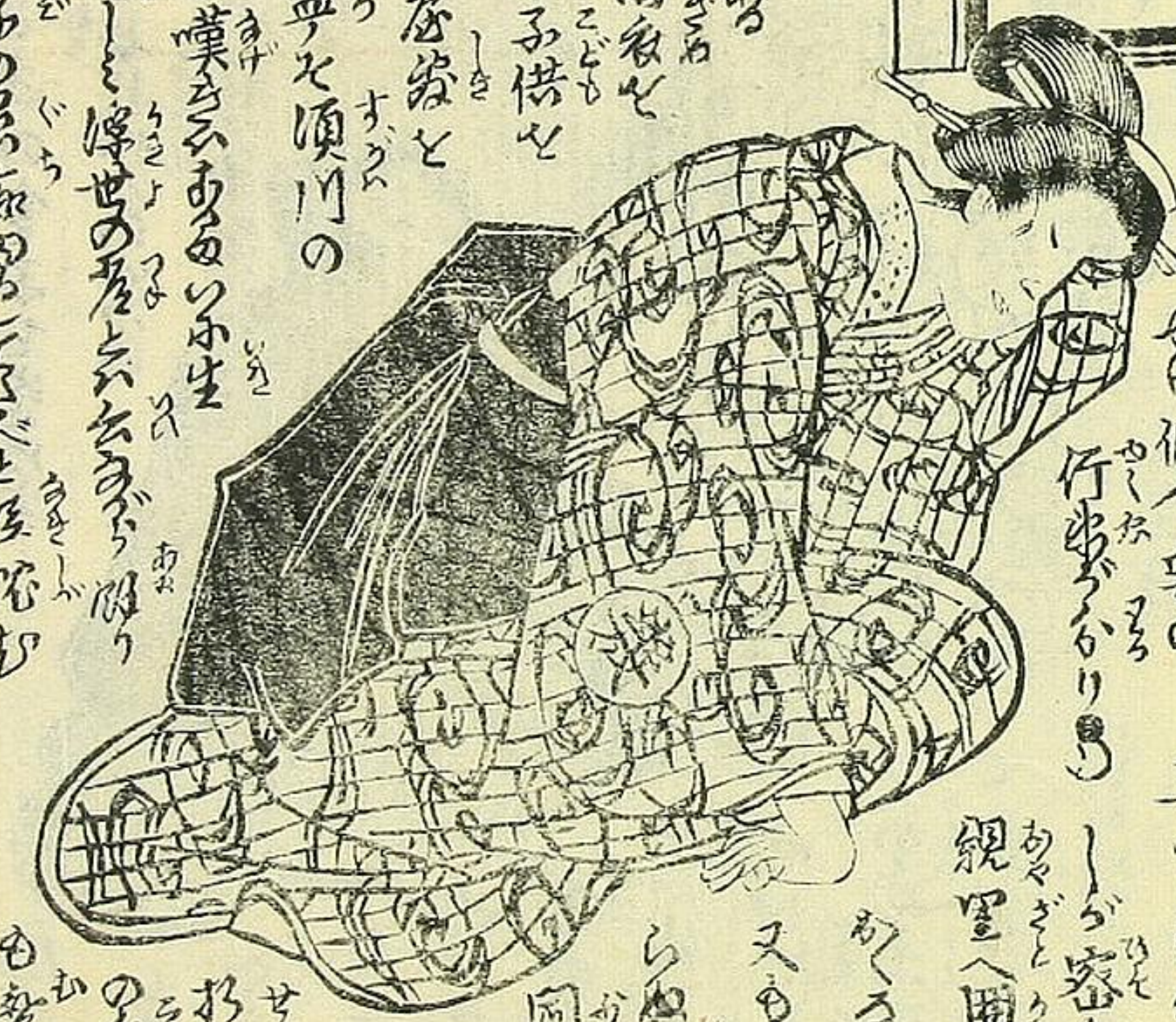
甘み再
び要る
ハ世をへ
對一様

あまもあれが
難縁の後の何
方へありとも
縁付方うら
らん花もうら河
ん幼を葉の世の
風後亦忍むる

▲きのす箱
み甘めてい
後のんあし
作て



世間の人ふ不義考へ
口端の林も併もある
必要のゆゑとあはして
あす由もあふか
送一七あつて八年
去の賜と種
縁店心要の及ふか
存らへてき後と
にのり有る猪
あひ同ト勤



かけ候令妻の
行末がかり

妻と離縁せ
親室へ圍ひ

又も良
らぬ風
同と
互え
られ
おと南
の心は
もあま
か
灰

つきほともいねいあくふらじき縁と探すじまやそやの
ためして夜寝も道具を外にまゐの合子をまゐらす

さなれど若おあけんが邪魔さなばあれはとりのつね
澎々五才の東西あふべと今母親の懐裏と
まますが不倣と秋あはば幾時ゆ

あてんを成たまで育てあけつゝとりのつね
ほせる勤者あつま帰つれは流風のつね
みあふねい後々と支放

と救ひのく裁時ゆ
名号を舊のおまふ
とゆ久させ沼田の株下
かろい情を離る判折部

後家村ある秋元沼谷小たあゆ



妻と親縁

風後も
のりり
おと自
然と裁
飛が貞
昔あるゆ
か僧人先小
啼けり若も
大の小未西一
て要が不業々
増む場合も
さじぶあまあゆ

とゆも色一住一什七物持り路儀
き離縁あおる注舟と速之就
ていあく何才一旅とも縁付せよと

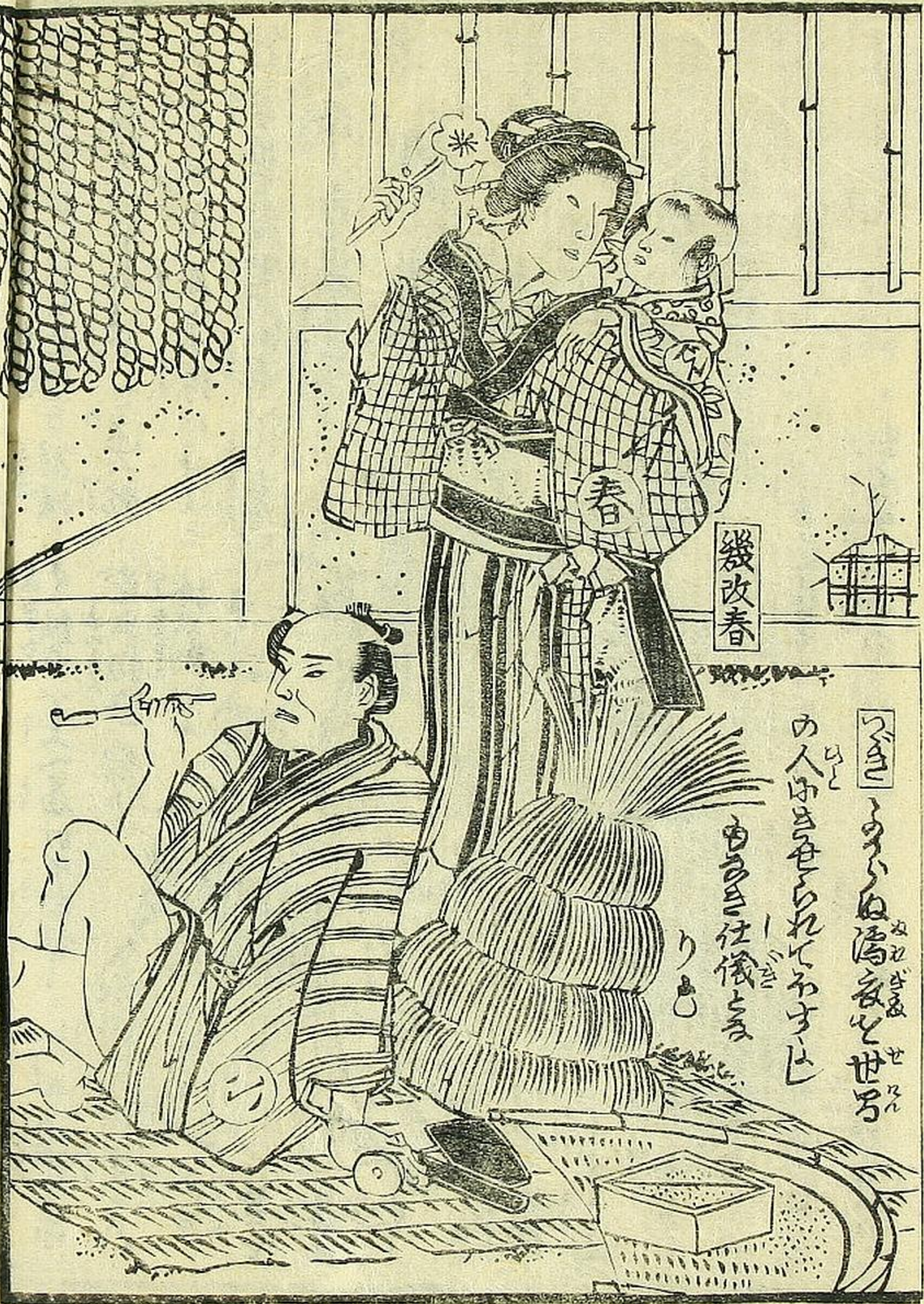
いひ合をて幾世のお春と小春
へ訂後なる勤者あつみの心の肉

あは
ほれ
ぬえ唇の
あそる軍旗か



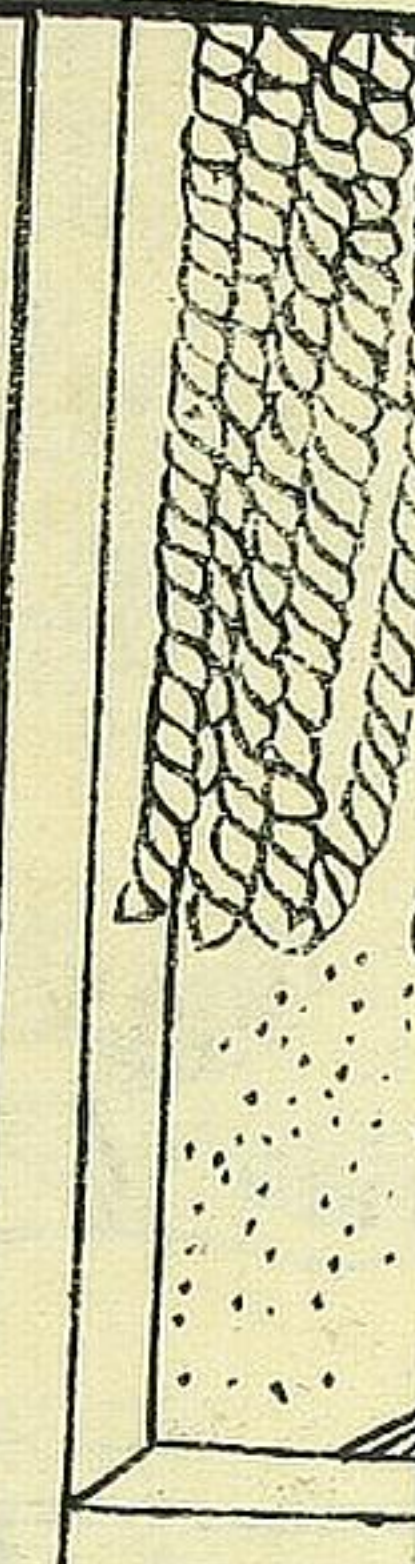
別をを悲しと家後下婢
様い鑑りふごく一それか男各とと由も看客

ふらしく家一更人初て勤者あつみの心の肉
あは
ほれ
ぬえ唇の
あそる軍旗か
あは
ほれ
ぬえ唇の
あそる軍旗か
あは
ほれ
ぬえ唇の
あそる軍旗か



つぎ 女が世をせよ
 の人おとせられておすは
 由りも仕儀とま

りも
 子のおまゝに
 妻お後いきてあり
 子のおまゝに
 妻お後いきてあり



下 厄除とあつてあまの
 心苦しく巨勸を弟のうらも
 早く嫁付
 こまより
 らんあまの
 由あれは心へたれど
 進むねとあまの毎に
 嫁後をせよあまの
 あり下村の名簿
 夫も同一名の伴儀男が
 春の標致の
 夫の定名
 上 小左衛門の
 嫁小
 子のおまゝに
 妻お後いきてあり

つとま婦の回小者

一人の子供もさられい

苦い子あてもせん

とわりのお

あくまの

門綱

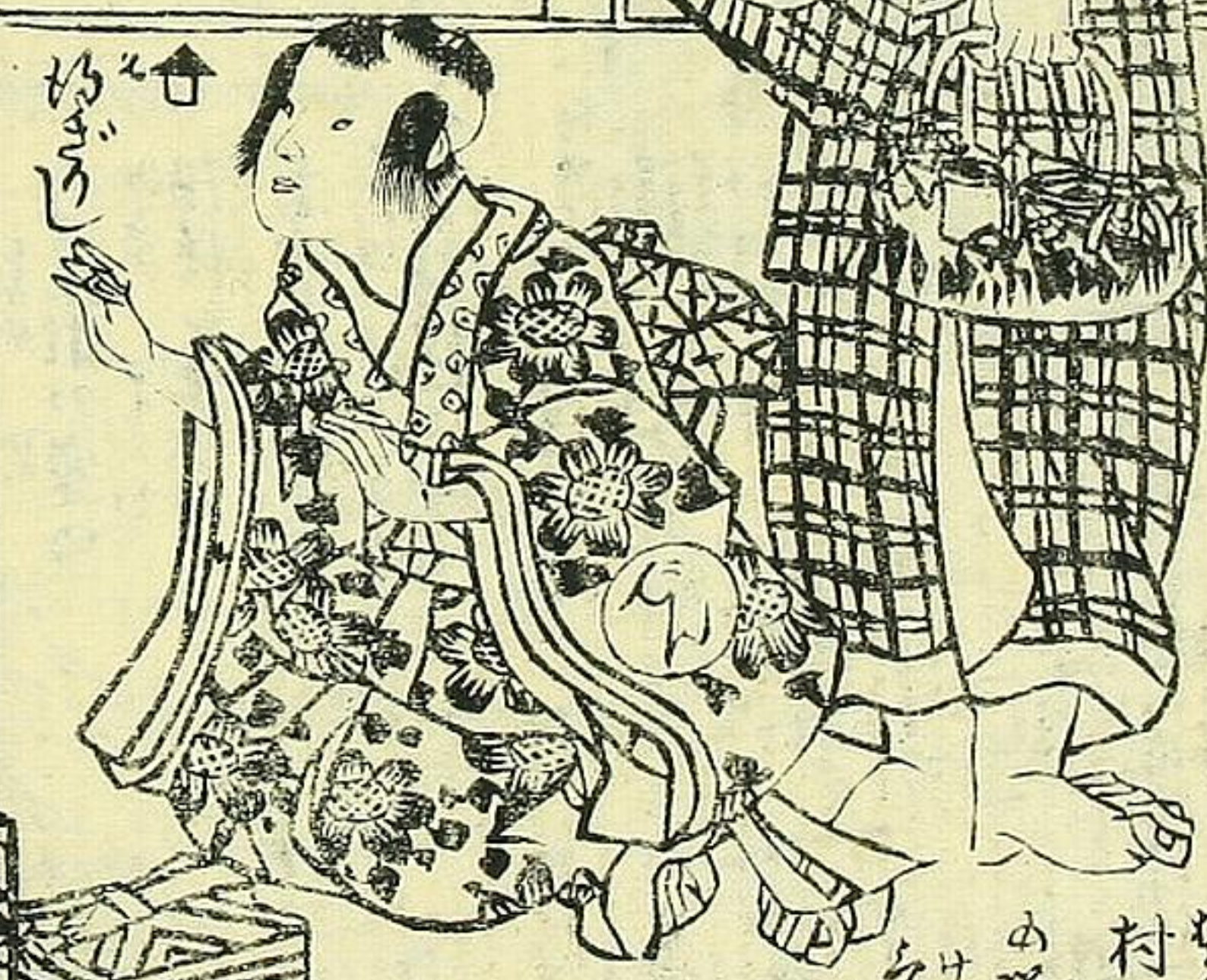
の種

あつとつと

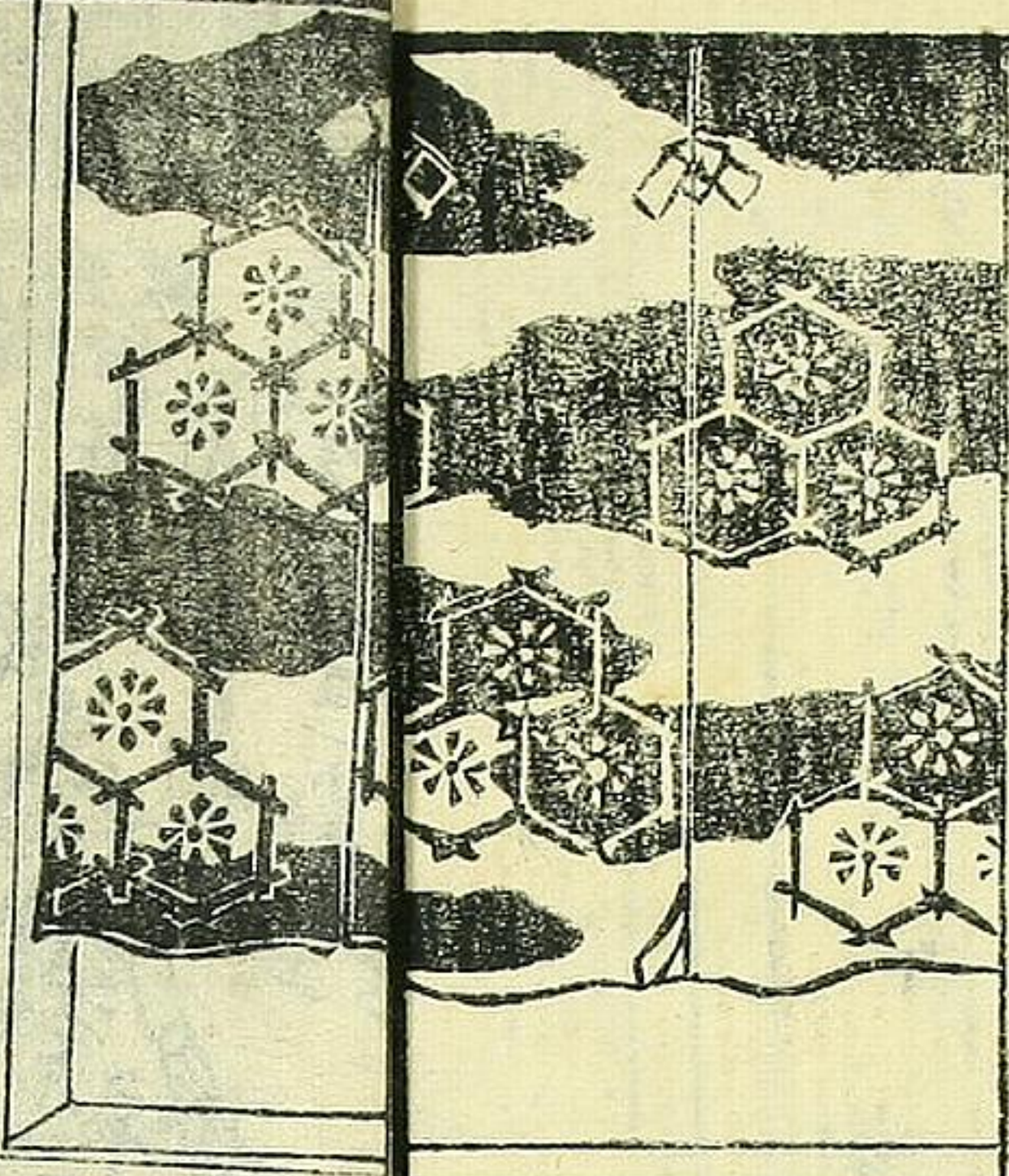


九右衛門の正女とよりしう後妻
日傘やて探し花よりしうし生まき子
つて面相のそ母状亦似るものなり

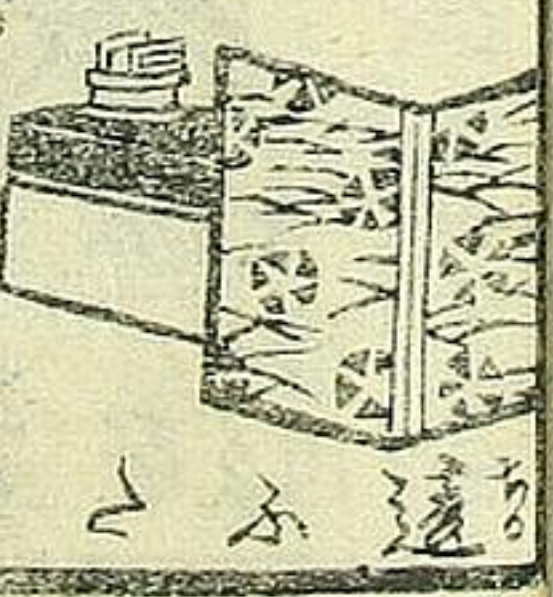
村の老に
の茶をりや
かた家
つた
つた
つた



ハ種
の
後



橋
まは引久娘のお徳
の徳を不きあるお徳を
まは引久娘のお徳



おんるねが足
の首してまひ

ふけにまはるおんと

り小冊子と一冊小

孫付事にはさるりま

式どはるひい安政えき年

おまのま小孫おれのもの

あつて又も難縁とわりの

間もろく病死してあ生中



事つとつとつとつとつと

九右衛門の夫婦の心はまき

つとつとつとつとつと

か傳二



胸根心ちつともほし小幸
 つまのちや過まりて今幸の
 元治元年と改めたる甲子の
 舞の初物も十六才會の花の只の
 以い風小あねも和らふるふあ初め心離々
 こそ我優一むのいふ
 せは海は入税のいふ事とせ
 ちまうぬ利に
 あり彩色
 村の若者
 若か袖
 つまひを
 擲削し而性めかと思ふ
 性か何きも果てなぬとせ

○以附ふあり
 世る
 徳川
 將軍家
 再以上落あつて糸たふ
 玄丸おろし閑茶はくも
 種々の取ゆ法とぬ
 とく
 鬼南
 小お説
 じま折
 かつ水声
 藩小
 強勃
 かわら
 一家中
 二か



胸根心ちつともほし小幸
 つまのちや過まりて今幸の
 元治元年と改めたる甲子の
 舞の初物も十六才會の花の只の
 以い風小あねも和らふるふあ初め心離々
 こそ我優一むのいふ
 せは海は入税のいふ事とせ
 ちまうぬ利に
 あり彩色
 村の若者
 若か袖
 つまひを
 擲削し而性めかと思ふ
 性か何きも果てなぬとせ

○以附ふあり
 世る
 徳川
 將軍家
 再以上落あつて糸たふ
 玄丸おろし閑茶はくも
 種々の取ゆ法とぬ
 とく
 鬼南
 小お説
 じま折
 かつ水声
 藩小
 強勃
 かわら
 一家中
 二か



合え廻し... 怪白おと... 赤小捕... 両家の形...

松のあけぼの... 夜小待... 松のあけぼの... 夜小待... 松のあけぼの... 夜小待... 松のあけぼの... 夜小待...

松のあけぼの... 夜小待... 松のあけぼの... 夜小待... 松のあけぼの... 夜小待... 松のあけぼの... 夜小待... 松のあけぼの... 夜小待... 松のあけぼの... 夜小待...

錦繪 問屋	地本	其名も高橋 毒舞小傳	東京奇聞道々 出板	大功臣名と傳	四冊	善悪振分變又六	全	漢法骨牌	一箱	命と養育善悪鏡	全	獣類一覽骨牌	一箱	遠所櫻梅松録	十五	在入小本	教品	単語首解	全	東東区分繪画	全	度見鳥江軍平	六冊漢切
-------	----	---------------	--------------	--------	----	---------	---	------	----	---------	---	--------	----	--------	----	------	----	------	---	--------	---	--------	------

板主 綱島亀吉

編集人 岡本勘造
浅草瓦町十二番地

麹町区書番丁廿七番地

010190510714





櫻齋房種画

二編下



A 464
6



中巻の... 敵の... 旗の... 徳川家... 下巻の... 土倉板... 武蔵と... 次へ

中巻の... 敵の... 旗の... 徳川家... 下巻の... 土倉板... 武蔵と... 次へ

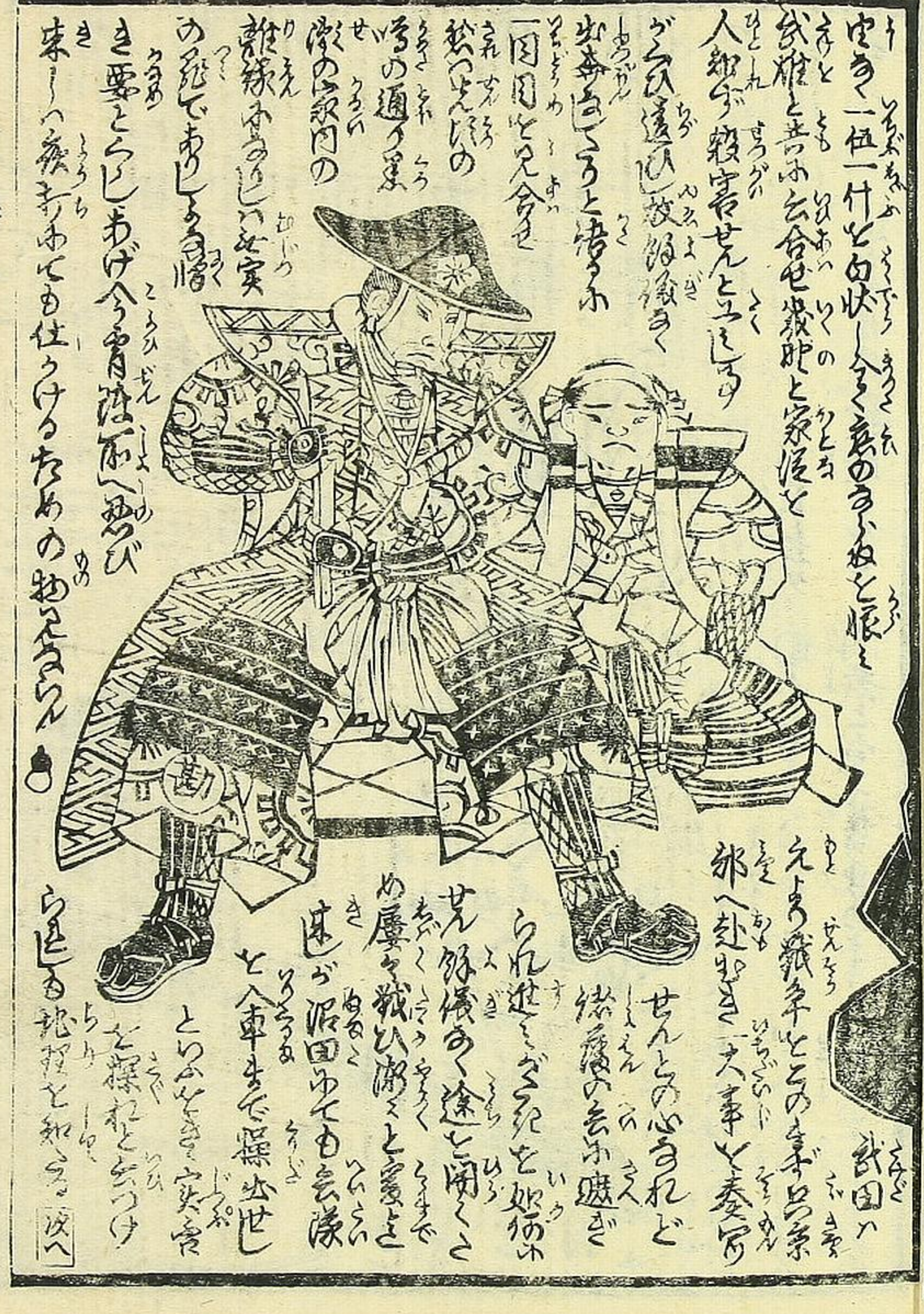


48-795/



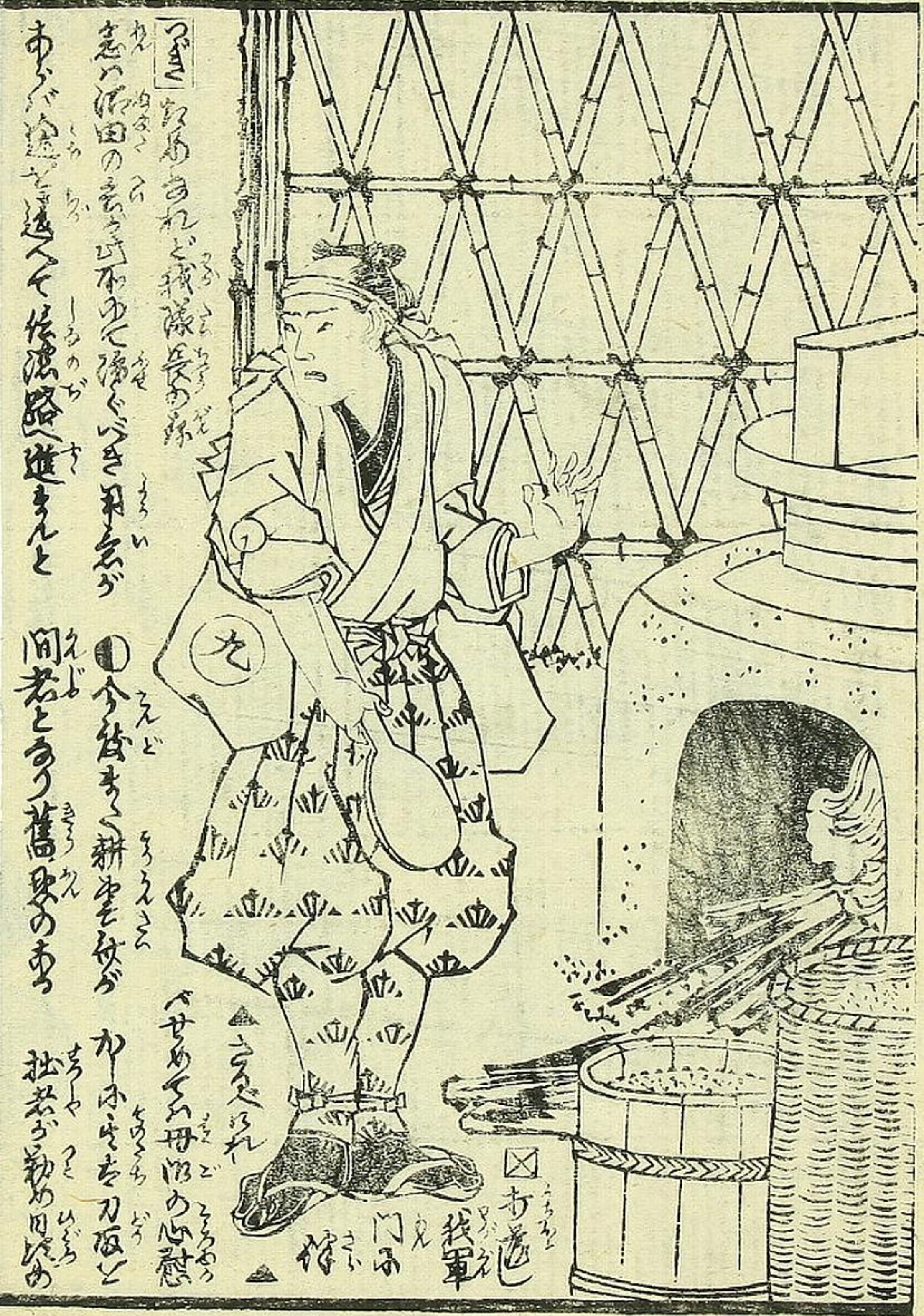
昔小説徒遠途ゆて武難小別してらふ家の
 空場雨の多たれ
 小入り今なき京
 那へ電も途中
 以近傍の路
 安内と意て
 来りより
 外お宮心
 市ふれが
 昔附の
 別染ゆ 一念ごひの助けを嘆く
 も亦之死先年須川の湯浴ゆて
 合心遠に共と清の同じとむむ

〇色
 生あり
 〇色
 若死
 息を
 つぎ
 何條
 のあき
 や隙也



中より一什と白状し今なき家のまねと恨
 武難と善ふと合を我財と家後と
 人知が殺害せんとす
 かくは遠い故路後
 出奔はこつと悟る小
 一因用と兄合を
 然のまねの
 考の通々更
 世の通々更
 激のは親内の
 難縁あるは
 のるにありしも
 主要とらじもげ今宵は雨へあび
 来しは夜もあても仕うけるため物とあは

武田ハ
 元より我幸とこの事
 邪へ赴き大幸と奏
 せんとの心されど
 後屋のまね
 られ進まざれば如ゆ
 其縁候も途と開くと
 め屢を我以漸くと愛と
 迷が泥田ゆても云後
 と入車まを羅出世
 とのふとま実
 を探れとつけ
 らはむ地程と知



あつたのこり先をて戦ふを系ね入ぬ
 心死すれは必らば
 こも秋の芳のつ
 ち出のつとまの軍令ありと解す
 小油形をなるとを幸に別て沼田の藤
 士留はまの幸とあふよりまろしゆ女んあつぬ田又
 給後とせんものと假かると浮中の檻小要と押迫強者
 つけて出のしるはは判の遠たをく沼田の城巾一度まるを
 早くもまをむく急激軍決の今幸一と致十八オウにては
 あり同形する母が敵隊の位をく要小帳とて返すの
 は討ちの被は先幸須川あて帳と南らき花ある上た

○ 今谷まを耕をせが
 間者とあり舊段のあ
 かせめて母沼の心懸
 かしをを刃返と
 拙者が初め目だめ

△ 心死すれ
 △ かせめて母沼の心懸
 △ かしをを刃返と
 △ 拙者が初め目だめ

○ 今谷まを耕をせが
 間者とあり舊段のあ

あつたのこり先をて戦ふを系ね入ぬ
 心死すれは必らば
 こも秋の芳のつ
 ち出のつとまの軍令ありと解す
 小油形をなるとを幸に別て沼田の藤
 士留はまの幸とあふよりまろしゆ女んあつぬ田又
 給後とせんものと假かると浮中の檻小要と押迫強者
 つけて出のしるはは判の遠たをく沼田の城巾一度まるを
 早くもまをむく急激軍決の今幸一と致十八オウにては
 あり同形する母が敵隊の位をく要小帳とて返すの
 は討ちの被は先幸須川あて帳と南らき花ある上た

○ 今谷まを耕をせが
 間者とあり舊段のあ
 かせめて母沼の心懸
 かしをを刃返と
 拙者が初め目だめ

△ 心死すれ
 △ かせめて母沼の心懸
 △ かしをを刃返と
 △ 拙者が初め目だめ

○ 今谷まを耕をせが
 間者とあり舊段のあ



九右衛門の七郎

むねと道下られ二人

いそひ軍治一夜

宅へ引ぬ九右衛門

村へ戻すも後中

峯げまろ利宏

お由重の

陣取あてのま士の面を

夜の月もぬき小篝を焚

て旗を小羽のぼして居る

白旗

むのめを被り好ん

戦ふらんあはぬ

とゆふを知り何事もや

心かおると目尻の腫れと

油防の大袂全寄小浪

ア何れのものまきま

どこのへ何れも

あすま

廻りつ

要が始終の

消へ

生後中

決へ

五



◇生しの
富助の奥
つる舞縁
もき上
と下と罷
雑
合詞
さへ打
念は固志
打たる由
おたれが教
ろき



◇生しの
富助の奥
つる舞縁
もき上
と下と罷
雑
合詞
さへ打
念は固志
打たる由
おたれが教
ろき

結城の陣を待

たじが候いざし

を陣小を

焼一のの

てそのま

中山

の方と

退きなる

物とを要

入死つ

後一切

とたの

毒ふ

率あて

今た

伏世

車小

源田

はひ

をを

要と

同合

小形

城



肉はあ

べき

紙の

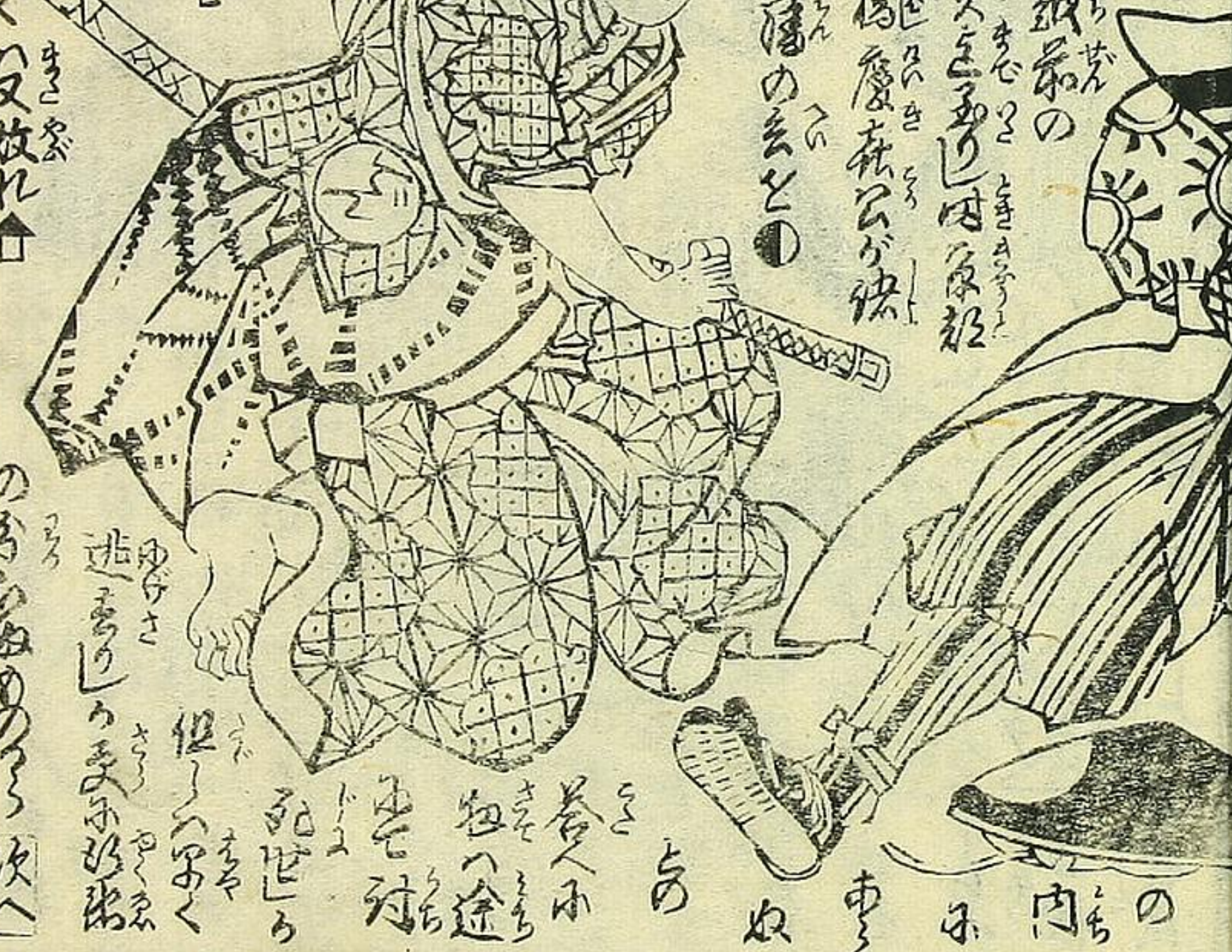
捕

二人

晴

られて

先宅



の

内

小

ぬ

あ

登

包



お茶の次男要はあつと
 田舎の村に身を隠す
 お盆の次男要はあつと
 田舎の村に身を隠す
 お盆の次男要はあつと
 田舎の村に身を隠す

要はあつと
 田舎の村に身を隠す
 お盆の次男要はあつと
 田舎の村に身を隠す

りやくお侍へ納借さ
 甘茶の田舎に掛るお侍さ
 飯の事にはお侍さ
 不承の侍もさ
 まゝに納借さ
 とを納り
 己
 月日
 り
 あ
 こ
 せ
 せ



納借さ
 田舎の村に身を隠す
 お盆の次男要はあつと
 田舎の村に身を隠す

錦繪 問屋 板主 綱島龜吉	其名も高橋 妻婦の小傳 東京奇聞 遺板	地本	大功臣名と傳 四冊	漢法骨牌 一箱	善悪振金雙六 全	浅草瓦町十二番地	編輯人 岡本勘造
命と巻物と善悪鏡 全	遠所櫻梅松録 十五	在入小本	教品	獣類一覽骨牌 一箱	六冊漢切	御届明治十二年二月三日	深川區富岡門前十二番地
東京区分繪品 全	徳兒島記事 六冊漢切	編輯人 岡本勘造					
漢法骨牌 一箱							
善悪振金雙六 全							
遠所櫻梅松録 十五							
在入小本							
教品							
獣類一覽骨牌 一箱							
六冊漢切							

御届明治十二年二月三日
 深川區富岡門前十二番地
 編輯人岡本勘造



○ 昔よりお徳のいふく毒婦の事など
 あり種々の悪事とある事と云ふ編り
 先出する暇もあつたが
 是れがまた味もては
 者一房△

○ 〇のいふ
 まゝ次の
 行末へ
 出さるゝ○

○ 〇のいふ
 まゝ次の
 行末へ
 出さるゝ○

○ 〇のいふ
 まゝ次の
 行末へ
 出さるゝ○

○ 〇のいふ
 まゝ次の
 行末へ
 出さるゝ○

